

## 「看護医療基礎」 5月12日

### 兵庫県立大学減災復興政策研究科浦川豪教授のお話



●今回の講義を受けて、被災すると言う意味や校内に配置されている防災拠点の位置など様々なことを学びました。“被災する”ということは、命や財産を失い、毎日の生活に支障をきたし重大な喪失体験になるということが分かりました。災害による喪失は、自分が大事にしていた物や大切な人と住んでいた家など対象がはっきりしたものと、見慣れた街並みや雰囲気など、対象がはっきりしないものがあります。その大切なものを失ったことにより自分の心の中と繋がっていたものも全て失う感覚になる人もいます。そして、その被災したものを震災遺構として残します。被災した方々の中には、見るのが辛く、震災の悲惨な記憶

がよみがえるから残したくないと考える方や、自然災害に対する危機意識や防災意識を高め次世代へ伝えるために残したいと考える方もいます。私はまだ大きな震災に遭ったこともないので簡単には言えないけれど、震災を風化させないためのモニュメントとして残しておきたいと考えました。実際に震災遺構を見たことがあり、テレビで見るのと直接自分の目でみるのでは印象が全く違いました。震災遺構はメッセージ性が強くて震災を次世代に伝えていく上で非常に大きな役割を果たすと思います。しかし、残しても当時の記憶がよみがえって辛いから壊すと考える方もいます。だからといって壊したところで何の解決にもならないしその失われた命は戻って来ないのでその命が教えてくれた事を次世代にも伝え、同じように命を失う事を減らす教えとすべきだと考えました。

●今回は兵庫県立大学の浦川教授からお話を聞き、被災や防災について学びました。大きな災害が起こると命や財産などが失われる可能性があります。しかし失われるのは物だけではなく、思い出も失われることを知りました。震災後、道に落ちている家具やアルバムなどをまとめて「がれき」と呼ぶけれど、誰かにとってはそれが大切な思い出で、人生そのものの価値であり、物ではないけれど大事な財産であると学びました。何も関係ない人にとったらただの汚れたものだと思うかもしれないけれど、ある人にとっては大切な思い出が詰まった思い出になるかもしれません。だから、これからはどんな物でもただ「がれき」とは思わず、誰かの思い出が詰まったものと考えて大切に扱おうと思いました。

講義を終えて、自分が大切なものが何かを考えてみました。普段から家族や友達は大切だと思っているけれど、改めて自分の周りにいる人がどれほど大切かを感じました。

家族や友達の命はもちろん大事ですが、知らない人の命が危ない時は家族に比べたら正直大切に違いがあると思います。しかし、その知らない誰かにも家族や思い出があり、命がなくなってしまうと何も出来ないのです、どんな時でも自分に関係ないと思わず率先して助けたいと思いました。この講義で1番印象に残ったのは

「被災地における1番の救援資源は被災者自身」であるということです。ボランティアの方達が被災地に行き、被災者の方に歌を歌っている動画を見た際、被災者の方が泣いている場面を見ました。歌だけでも心を動かすことができるということに感動しました。これから被災地のボランティアに参加することがあれば被災者であってもなくても、多くの人とふれあい、被災者の方の心を少しでも救うことができる「救援資源」に自分がなれたらいいなと思いました。



